

第1回 関西大学 卒業生調査レポート



表1 調査概要

調査主体	内部質保証推進プロジェクト
調査期間	2023年8月7日～10月9日
対象者	合計 24,429 名 (学士課程卒業後約 3 年、8 年、13 年、18 年、23 年の 5 世代)
回答者	4,423 件 (回答率: 18.1%)
実施方法	オリジナルで Web アンケートを作成 / ハガキにて回答依頼 (ハガキは 8 月上旬・9 月中旬の 2 回発送)
主な調査項目	
1. 基礎情報	性別、年齢、居住地、入学・卒業年、所属学部、入試方式、志望度等
2. 大学時代の経験	学習に対する熱心度・印象・満足度、大学の組織風土、学業成績等
3. 卒業後(現在)の状況	就業状況、ウェルビーイング、キャリア満足度、大学への愛着度・推奨度等
4. 大学への要望	大学時代に育成すべきだと思う能力、大学への要望(自由記述)等

関西大学内部質保証推進プロジェクトでは、教学 IR プロジェクトとの共同により、関西大学のこれまでの教育を振り返り、改善に資する資料を得るために、第1回卒業生調査を実施しました。調査概要を表1に示します。卒業生が関西大学での経験をどのように評価し、学んだことを活かして充実した生活を送っているのかを明らかにすることは、学習成果・教育成果の可視化の一環として極めて重要です。また、教学マネジメント指針においても、「卒業生に対する評価」ならびに「卒業生からの評価」は、「卒業認定・学位授与の方針」の見直しを含む教育改善を行うための情報として位置づけられています。このようなことから関西大学では、「大学時代の経験」「卒業後(現在)の状況」「大学への要望」の3つのカテゴリーに焦点をあてて調査し、分析を行いました。

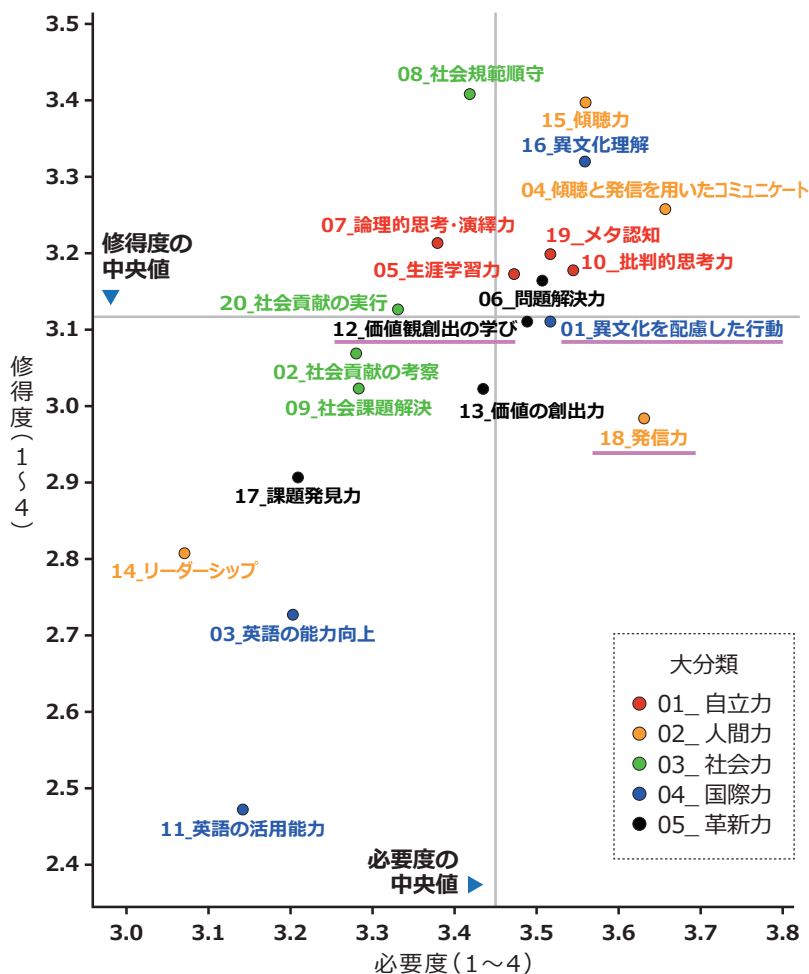
大学時代に育成すべき能力

まずは[4. 大学への要望]として、卒業生が評価する「大学時代に育成すべきだと思う能力」について、2022年度卒業生調査の結果と併せて分析しました。調査項目には関西大学で育成する「考動カコンピテンシー(自律力、人間力、社会力、国際力、革新力の5つの大分類で構成)」の20項目を用いています。その結果を図1に示します。縦軸は2022年度卒業生調査によるコンピテンシーの修得度(「4. とてもよくあてはまる」～「1. まったくあてはまらない」の4件法)、横軸は今回の卒業生調査によって明らかになったコンピテンシーの必要度(「4. 重要だと思う」～「1. 重要だと思わない」の4件法)であり、項目ラベルには実際の質問文の概念を反映した短縮名称を表示しています。また、修得度・必要度の中央値(それぞれグレーの横線・縦線)によって4つの象限に分けています。右上の第1象限は必要度・修得度がともに高く、ここにマッピングされた項目については、ニーズと実態がマッチしていることを示しています。特に、人間力の「傾聴と発信を用いたコミュニケーション(まわりの人とコミュニケーションをとりながら、行動ができる)」と「傾聴力(相手の意見を丁寧に聴くことができる)」、国際力の「異文化理解(異なる意見を持つ人々の立場に立って考えることができる)」がこれに該当します。

一方で右下の第4象限は今後重点的に育成すべき能力(必要度は高いが修得度が低い項目)を示し、ここにマッピングされた項目にはピンクの下線を付しました。これを見ると、人間力の特に「発信力(自分の意見や考えをわかりやすく伝えることができる)」、国際力の「異文化を配慮した行動(言葉や文化・社会背景の異なる人々が集まる場面において適切にふるまうことができる)」、革新力の「価値創出の学び(自ら進んで新しいことを学ぶことができる)」について、より高い水準が求められているようです。

以上を整理すると在学生には、優しく丁寧な人柄を強みとして大事にし、それに加えて、興味・目標に向かって新しいことを学ぶ中で多様な人々の価値観・考え方に配慮し、自分の考えをうまく伝えることのできる力を養うことが重要だと考えられます。

図1 考動カコンピテンシーの必要度と修得度



卒業後(現在)の生活を充実させる要因はなににか

次に、【2. 大学時代の経験】及び【3. 卒業後(現在)の状況】について分析しました。ここでは調査項目数が多いため、要約的に全体像を把握できるように、大学時代の経験及び卒業後(現在)の状況に関する項目に因子分析という統計的な処理を行っています。これにより、類似した項目が同じ要素にまとまるように分類しています。その上で、大学時代の経験が、卒業後(現在)の状況にどのように影響を与えているのかについて、重回帰分析を用いて検討しました。その結果を表2に示します。図中に★印がある箇所は、統計的に有意な影響を与えていることを示しており、その★の数が多いほど、よりはっきりとした結果が出ていることを示しています。大学時代の経験に関する各項目について横に目を移していくと、学習経験については「対話的・探究的な学び(フィールドワークや探究学習・プロジェクト学習等)」の経験が卒業後の様々な要素に影響を与えていることがわかります。成長実感については、関西大学の学是(理念)である「学の実化」が全ての要素に影響を与えて

おり、改めて大学の理念の妥当性とそれを実現するための教育研究の重要性を示唆するものだと思います。学生生活への満足度に着目すると、人間関係が全ての要素に影響を与えています。したがって、人間関係に関連する部活動・サークル活動をはじめとする正課外活動も、学生の学習成果を語る上で欠かせない要素だといえるでしょう。また、大学の組織風土についても、キャリア意識を除く様々な要素に影響を与えています。中でも学生参画は、クランボルツ & レヴィンによるブランド・ハブ・スタンス理論で提唱される偶然を活かす力の獲得状況に影響を及ぼしているようです。これは、キャリア形成において極めて重要な力だと考えられています。また、大学との心の距離に影響を及ぼしていることから、学生参画の推進によって学生と大学が対話的な関係を結ぶことが、将来の卒業生ネットワークを強くしていくことに寄与すると考えられます。

一方で、「学問の深化」「専門的な学び」「学業成績」といった要素については、明確な影響関係を見出す

ことができませんでした。ただしこの結果は、「学問は将来の役に立たない」ということを示すものではありません。本来、学問を深化させる過程において、指導教員や研究室の仲間と議論を交わしたりして、対話的・探究的な学びや人間関係、学の実化に関連する経験を積むことが一般的です。そこで培われる汎用的能力や課題解決力、仲間とのネットワークは、卒業後の生活を充実させる上で大いに役立つものと考えられます。今回の分析では、「対話的・探究的な学びや人間関係などの他の要素の満足度が一定だと仮定した上で、学問や専門的な学びの満足度だけを向上させると卒業後の生活にどんな影響があるか」を検証したもので、学問の過程で経験する副産物的な学びが考慮されていません。したがって今回の結果は、「他者とのつながりや社会貢献を意識することなく、自分の専門性を高める学びに注力するだけでは、卒業後のウェルビーイング等にはつながりにくい」という解釈をすることが妥当だと考えられます。

表2 「卒業後(現在)の状況」を従属変数にした重回帰分析の結果

			卒業後（現在）の状況										
			ウェルビーイング				キャリア意識		偶然を活かす力		大学との心の距離		
			良好な人間関係	成長意欲	将来への展望	自分軸の形成	仕事の充実感	将来への準備	好奇心の維持	広い視野の維持	大学への親しみ感	大学の恩恵	大学とのつながり
			「私は、あたたかく信頼できる友人関係を築いている」等の4項目	「これからいろいろな面で成長し続けたいと思う」等の2項目	「私はいつも生きる目標を持ち続けている」等の2項目	「私は自分の生き方や性格をそのまま受け入れることができる」等の4項目	「現在の職場での仕事に満足している」等の4項目	「仕事に必要なスキルを職場外で自主的に学んでいる」等の2項目	「失敗や困難もポジティブに捉える」等の3項目	「興味関心のある分野にとどまらず、普段から視野を広げるよう努める」等の2項目	「関西大学の卒業生であることを誇らしく感じる」等の2項目	「卒業後も関西大学の近況をHPやSNS・広報などで確認している」等の3項目	「現在も交流を続けている大学時代の友人がいる」等の2項目
大学時代の経験	学習経験	対話的・探究的な学び	★★★★	★★★★	★★★★	★★★★	★★	★★★★	★★★★	★★★★		★★★★	★★★★
		指示・遵守的な学び											
	成長実感	学の実化	★★★★	★★	★★★★	★★★★	★★★★	★★★★	★★★★	★★★★	★★★★	★★★★	★★★★
		学問の深化											
		教員の関与	★									★★★★	★★★★
	学生生活への満足度	キャリア形成支援					★				★		
		専門的な学び											
		多様な分野の学び									★★★★		
		人間関係	★★★★	★★★★	★★★★	★★★★	★★★★	★★★★	★★★★	★★★★	★★★★	★★★★	★★★★
		学習環境		★★★★	★	★★★★	★★	★★★★	★★	★★★★	★★★★		
	大学の組織風土	学び方の多様性											
		学生参画			★				★★	★	★★★★	★★	★★★★
		価値観の多様性		★	★	★							
		学業成績											



卒業生の実態とそれを決定する要因

それでは、卒業生の実態はどうなのでしょう。先程の大学時代の経験（学業成績は除く）と卒業後（現在）の状況に関する変数を用いて、卒業生を統計的に分類した結果、5つのグループに類型化されました。大学時代の経験が特にポジティブなグループは、卒業後の状況もかなり良好であり（大学・現在高満足群；9.9%）、それに次ぐグループも同じ特徴を有しています（大学・現在満足群；36.8%）。また、反対に大学時代の経験が特にネガティブだったグループは、卒業後の状況も良好ではないという結果になっています（大学・現在不満足群；11.3%）。一方で、卒業後の状況は比較的良好なもの、大学時代の経験がネガティブなグループ（大学不満・現在満足群；20.3%）や、それとは対照的に大学時代はそれほど不満がなかったとしても、卒業後の状況においてネガティブに転じているグループ（現在不満足群；21.6%）もあります。以降ではこのような特徴をもつ5つのグループを総称して、満足度タイプと呼ぶことにします。

続いて、満足度タイプがどのような条件によって分類されているのかについて、決定木分析という手

法を用いて検討しました。その結果を図2に示します。なお満足度タイプについては、卒業後の状況が良好であるほど暖色～良好でないほど寒色になるようにカラーリングしています。これを見ると、より良好な満足度タイプへと分類されるには大学時代に経験した「教員の関与（「教育に対して熱意のある教員がいた」「教員の指導に基づきながらも、自主性を尊重されて学習を進められた」等の4項目）」が前提条件として最も重要であることがわかります。その上で、卒業後において「良好な人間関係」を築けていることや、大学時代の経験として「価値観の多様性」を承認する組織風土を実感できたこと等が大学・現在高満足群に分類される要因となっています。

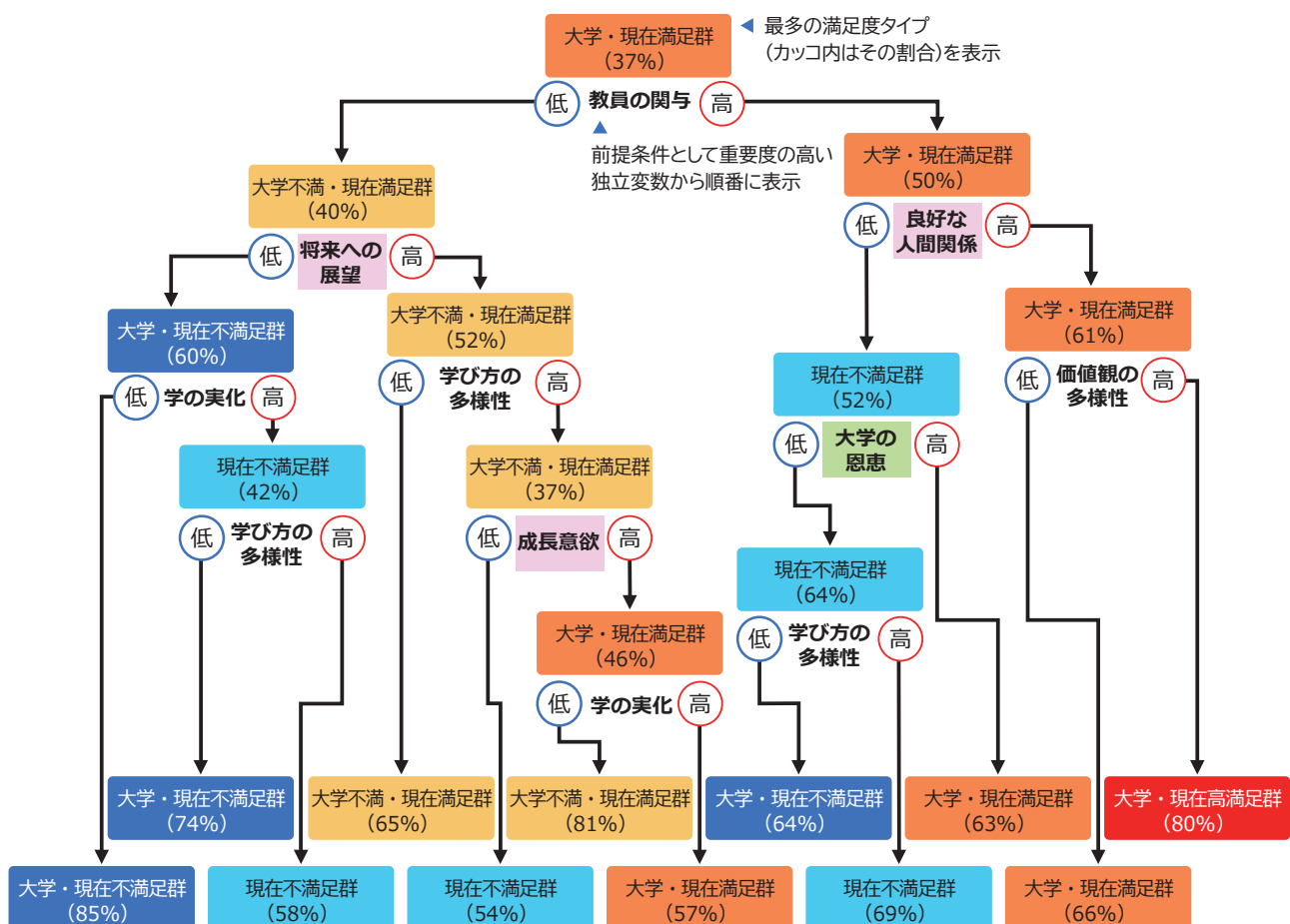
一方で、残念ながら「教員の関与」に関する経験が十分でなかった場合でも、ある程度良好な大学・現在満足群に分類される卒業生もいるようです。まずは卒業後の状況において、「将来への展望」を持っていることが前提となっており、それを満たしていれば、大学時代の経験として「学び方の多様性」を実感したことが良い効果をもたらすようです。しかしこれだけでは不十分であり、現在の「成長意欲」はも

ちろん、大学時代における「学の実化」に関する学びの経験とセットで充実していることが重要なようです。特に、「学の実化」に関する学びの経験は、大学に対する評価のポジティブ/ネガティブ（大学・現在満足群 / 大学不満・現在満足群）を分ける重要な要素となっています。

以上より、大学時代の経験として「教員の関与」「価値観の多様性」「学び方の多様性」「学の実化」に関する経験を充実させることが最も重要だと考えられます。また、卒業後の状況に対する取り組みとしては、「良好な人間関係」「将来への展望」「成長意欲」につながるよう、例えば卒業生同士・教職員とのネットワーク構築、リカレント教育・リスクリングにつながる環境を整えることも重要になると考えられます。



図2 満足度タイプの決定要因



※満足度タイプを従属変数、卒業後の状況、大学時代の経験、個人属性、就業形態、所属学部等を独立変数に設定した決定木分析により樹形図を作成（n = 3,465）
 ※前提条件となる独立変数のうち、マーカーを引いたものが卒業後（現在）の状況を示す（ピンク：ウェルビーイング、緑：大学との心の距離）

卒業生からのメッセージ

先程までは、定量的なデータに基づいて各要素の関連や卒業生の実態についてみてきましたが、それだけではなかなか見えてこないものもあります。そこでここでは、「関西大学への要望、在学生へのメッセージ」について自由記述で回答を求めた結果をみていきたいと思います。網羅的に提示することができないため、ユーザーローカル社のテキストマイニングツール(<https://textmining.userlocal.jp/>)を用いて自動要約したものを図3に示します。これを見ると在学生に対しては、「①様々なことへ挑戦し自分自身を成長させること」「②自分の興味・関心に合わせて多くの経験を積み、将来の選択肢を広げる基盤を作ること」「③大学生活を思い切り楽しむこと」が主なメッセージとなっています。また、関西大学に対しては、「①学生たちの意見を積極的に取り入れ、サポートする仕組みを整えること」「②大学として広い視野を持ち、地域や世界で活躍する視点を持つこと」が主な要望として挙げられています。これらに加えて、在学生・大学の双方に関連する課題として、「学生たちが自由な選択肢を持ち、自分の興味・関心に向かって全力で取り組むこと」があり、これを可能とする組織風土を在学生・教員・職員の三者協働で醸成していくことも重要だと考えられます。

図3 卒業生からのメッセージの要約
(824名、合計103,873文字より)

関西大学の学生たちは、大学生活を充実させるためにさまざまなことに挑戦し、自分自身を成長させることが重要です。大学側も学生たちの意見を積極的に受け入れ、サポートする仕組みを整えるべきです。在学生には、自分の興味や関心に合わせて多くの経験を積み、将来の選択肢を広げるための基盤を作ってほしいと思います。大学生活は一瞬であり、思い切り楽しんで過ごすべきです。また、関西大学は広い視野を持ち、地域や世界で活躍する視点を持つことが重要です。さらに、学生たちは自由な選択肢を持ち、自分の興味や関心に向かって全力で取り組むべきです。大学での経験や友人は一生の宝物であり、将来の人生に大きな影響を与えるものです。関西大学は学生たちにとって素晴らしい環境を提供しており、学生たちはその環境を活かして充実した大学生活を送るべきです。



まとめと今後の大学教育の方向性

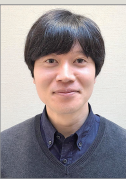
今回、全学では初となる大規模な卒業生調査を実施することとなりました。まずは、ご協力いただいた卒業生のみなさまに御礼申し上げます。大学の果たす最も重要な役割は、卒業後に健やかで幸福に生きていくための土台を培うことにあると考えています。卒業生調査の目的には、大学教育の成果を検証することに加えて、卒業生の状態を把握したり卒業生との繋がり機能を担ったりすることも含まれます。今回の調査結果から得られた示唆は以下の通りです。

- (1) 育成に注力すべき考動力コンピテンシーは、「発信力」「異文化を配慮した行動」「価値創出の学び」であり、よりアウトプット(実経験)の機会を取り入れること。
- (2) 卒業後のウェルビーイング等様々な側面に肯定的な影響をもたらしており、今後より重視すべき大学教育は、「対話的・探究的な学びを促すAL型授業」と「学びと実社会の接点(学の実化)」を取り入れた実践を取り入れること。
- (3) 大学時代と社会生活双方に肯定的な影響をもたらす最も重要な変数は、「教員の関与(熱意のある教員がいた等)」、次いで「良好な人間関係」「価値観の多様性」であり、対人的教育・学習環境の質を高めていくこと。

以上のことから、学びと社会が繋がり、学びを介して学生同士・学生と教員が繋がり、そうした場・機会を教員が熱意を持ってデザイン・提供すること、大学全体がこの実現に向けて動いていくことが重要だということを強く感じました。

山田剛史(教育推進部副部長・教授)

一 編集後記



教育推進部
特別任用助教
近藤 亮介

卒業生の皆様、このたびは調査にご協力いただき、誠にありがとうございました。今回の調査によって、これまでの調査では見えにくかった考動力コンピテンシーの育成課題や、大学時代・卒業後の生活をより充実させるための要因について検討することができました。表2のように卒業生に共通する要因を探るアプローチと図2のように卒業生をタイプに分けてから要因を探るアプローチでは、結果の見え方が異なります。前者の分析だけでは、「学び方の多様性」等の重要な要因を見落としていた可能性があります。大学のDEI(多様性・公平性・包摂性)の観点では、IR活動においても共通性及び多様性の双方に配慮した分析や取り組みが重要だと感じました。



教育開発支援室
/ 教学IR室
西村 瑛皓

卒業生調査を計画して約1年半、全学規模での卒業生調査は初めてということで、他大学や企業の情報収集だけでなく、学内調整も難航しましたが、お陰様で無事に実施することができました。今回の調査結果を用いて、本学のさらなる教育・学修支援の改善に役立て、学生にとってより良い教育を届けられるよう、教学IRプロジェクトチーム一丸となり、データを活用してまいりたいと思います。

この度はお忙しいところ、卒業生調査のご回答にご協力いただきました卒業生の皆様ありがとうございました。ならびに実施にご協力いただきました関係各所の方々にも御礼申し上げます。



KANSAI
UNIVERSITY

分析・編集・発行/関西大学教学IRプロジェクト

発行日/2024年2月 調査/内部質保証推進プロジェクト

